

大正六年四月

# 校友會雜誌

滋賀縣立彦根中學校校友會

第貳卷第貳拾五號

# 校友會雜誌第二卷第二十五號目次

## 挿圖

○大正六年度第二十九回卒業生寫眞

## 講演

○陸軍紀念日軍事講演 第十九聯隊 三雲少佐殿

## 論說

○社交生活 第五學年甲組 瀬川 幸造

○旅行 第五學年甲組 伊之坂三淵

○學生と元氣 第五學年甲組 松岡源之真

○音樂の獎勵 第五學年甲組 渡邊 勝巳

○賢愚果して孰れぞ 第五學年乙組 松川 武吉

○武道に就きて愚見を述ぶ 第五學年乙組 藤村小次郎

○修養時代の貧苦は寧ろ幸福ならんか 第五學年乙組 藤本弘治郎

○進んで運を捉ふべし 第二學年甲組 宮戸 龍憲

## 文苑

○湖邊のあした 第五學年甲組 小村貞三郎

○海に對して 第四學年甲組 奥井 武一

○思ひのまゝ 第四學年甲組 岡村 五郎

○風呂貰ひ 第四學年乙組 東野 亮

○椿 第三學年丙組 木下八郎右衛門

○初巳詣で 第二學年乙組 大久保明文

○長濱遠足の記 第一學年丙組 加藤新一郎

## 韻藻

○新體詩

新年 特別會員 村田林次郎

使ひ 第三學年丙組 中村 吉治

○短歌

新しき悲しみ 第四學年乙組 北川彌太郎

○俳句

俳句集 第五學年甲組 久米 健次

部 報

○陸上大運動會記錄

○武術部報  
○相撲部報

雜 報

○聯隊見學記○發火演習參加記○統計上より見た寄宿舍○日誌摘要○寄贈雜誌○編輯餘瀝

附 錄

乾 反 葉

第五學年甲組 伊之坂三洲  
第五學年甲組 松岡源之真  
第五學年乙組 藤本弘治郎  
第五學年乙組 東野 亮

英 語

○Scraps.

R. Murata.

○Our School rifle Practice.

G. Matsuoka.

○How Did I Spend My Winter Holidays?

A. Higashino.

○Cus School.

T. Takigai.

通 信

○瑞穂ヶ丘より(第一信) 校 友 仙 波 科

大正六年三月卒業スベキ第五學年生徒

杉立龜之壺 金錄 武雄 長尾 慈雲 水 青谷 長三 小川 桂瑞 文室 康男 中村 太四郎 藤澤 謙有 豐滿 春了 大和 田先生 高務 隆音 寺田 李太 常喜 郁郎 渡邊 勝巳 大西 先生 大植 先生 長谷 良三 西川 文吉 藤澤 謙有 中村 太四郎 藤澤 謙有 豐滿 春了 大和 田先生 吉田 繪二 久本 徹右衛門 山口 廣吉 青木 先生 白田 先生 大平 佐一郎 小川 桂瑞 文室 康男 中村 太四郎 藤澤 謙有 豐滿 春了 大和 田先生 藤村 小次郎 田 附 武 德永 徹照 山本 秀雄 山本 先生 山岡 先生 松岡源之真 辻 傳治郎 丸本 進一郎 花本 末吉 熊瀬川 先生 伊之坂三洲 土田 清一郎 小村 貞三郎 幸島 貞一 上松 先生 梅田 先生 馬場 孝三 久米 健次 瀨川 幸造 幸島 貞一 上松 先生 梅田 先生 坂 敏 皆木 覺 松川 武吉 熊澤 幸一郎 金澤 先生 太田 先生 辻 茂三 中川 平太郎 山川 秀三 藤本 弘治郎 木川 先生 太田 先生 大島 居武彦 瀧谷 德樂 黑田 利三郎 押谷 秀雄 池田 先生 立花 先生 加納 喜三郎 池山 秀夫 猿橋 重雄 古川 淳五郎 田中 清太郎 柳 先生 遠山 先生 池山 秀夫 猿橋 重雄 細矢 信一郎 勝馬 孝藏 田附 信治郎 佐成 爲三郎 坂 安信 市毛 國範 澤 靈太郎 本田 先生 達 崎 先生 市毛 先生



# 校友會雜誌

第二卷第二十五號



講演

陸軍三雲少佐軍事講演  
紀念日

大正六年三月十日

エー私は只今校長殿から御紹介して頂いた三雲であります。お話する前に當つて平にお謝りして置く事は實は今日九時から開始するといふことにして居りましたが途中汽車に故障を生じて、爲めに豫定よりも少し後るゝに至つた事である。深くお謝りしておきます。只今校長殿からお話のあつた通り本日は今より十二年前奉天の大平野に於て我が日本軍が熱誠を以て優勢なる露軍を破つた紀念日である。この紀念すべき日に當つて校紀嚴肅而かも尙武の氣に富める諸君の前に一場の軍事講話をなすといふのは此の三雲の欣幸且つ光榮とする所であります。只生來の菲才而も淺學以て諸君に利益ある講話をなす事の出來ないのは慚愧に堪えない次第であります。

人間は兎角時日を経ると事を忘れ勝ちなるものである。況んや太平無事の我國に於きまして十二年前の奉天戰の如きは忘れ易いものである。それで私が今日お話するといふのは只諸君が毎年聞いて居られる

事の記憶を喚起するに過ぎないのである。何等新しい事實をお話するのではない。かくお話して以て諸君の責任を釋くわけになるのであります。

此の日露の戦争をお話するについて當然話さねばならぬのは即ち只今校長殿からお話のあつた歐洲戦亂の事であります。それで私は此に日露戦争の概略より説き起し以て歐洲戦争の事に及ぶ考であります。勿論概要ではあります。幾分諸君の御参考になる事もあらうかと考へるのであります。

只今此に掲げました通り演題は「三十七八年戦役を追懷して歐洲戦亂に及ぶ」といふのであります。先づ順序として三十七八年戦役の概要を述べます。願れば明治三十七年二月八日突然一快報は我が國民の耳朶を貫いたのである。それは我が聯合艦隊が露國の金城湯池と頼んで居つた旅順港攻撃の飛報である。明けて翌九日わが瓜生艦隊が仁川沖に於て露國艦隊を撃破したといふ快報が達しました。天皇陛下萬歲大日本帝國萬歲の絶叫の第一聲は實に此の時發せられたのであります。同十一日紀元節の祝日を以て宣戰の詔勅は布告され陸軍に於ては同年五月一日黒木大將の率ゆる第一軍は朝鮮の北方九連城の攻撃を敢行した、此が陸戰の皮切りである。

其時の形勢は茲に圖示する事にいたします。

朝鮮方面より北進したる大將の軍隊は九連城攻撃に於て實に立派なる大捷を博したのである。日露戦争に於て我國が露國よりも優勢の兵力を用ひたのは實に此の九連城攻撃只一回であります。最初の振興の上に大關係を及ぼす。故に我軍は優勢なる兵力を用ひて見事大勝利を得たのである。

奥大將の率ゆる第二軍は南山を攻撃して敵を撃退し一部は旅順に敵をおし込め大部は北に向つて進んだ

のである。此の時敵將スタキルベル將軍は大兵を率ひて南下して來たが我第二軍は之れと衝突して撃退し大石橋方面に壓迫した、第四軍更に此れに加はつて敵を遼陽方面に壓迫した。

次いで乃木大將の率ゆる第三軍は第二軍と交代して旅順口を攻撃することになり第一軍、第二軍、第三軍、第四軍が滿洲に於て戦ふ事になりました。此に於て滿洲軍司令部といふものが設けられ大山元帥は渡滿せられて滿洲軍を統一せらるゝ事になつたのである。

乃木軍は旅順他は遼陽を攻撃するといふ事となつたが其の中遼陽も難なく陥落し我軍は勇みに勇んで沙河の方へと敵を壓迫しました、此れに四六日を要したのである。

沙河の線に至るや敵は増援を得て抵抗せんとし我れは負傷兵の補充、戰鬪力の恢復等の爲め約一ヶ月を費し備悉くなるを待つて我れは再び攻撃に轉じたのである。

次で沙河を突破し敵を奉天におしこめました。

わが大山元帥は旅順攻撃を終へた第三軍を以て敵の右翼に迂回せしめ別に川村大將の率ゆる鴨綠江軍を以て敵の左側方を突かしめ他は正面より進出し、以て敵を奉天城に攻圍するもの策戰を取られたのである。當時各軍に與へられた策戰命令は大略次の如くである。(全文を朗讀せられたるも筆記し得ざりしは遺憾)

鴨綠江軍 敵の左側に索動し滿洲軍の攻撃をして容易ならしむる事。

第一軍 敵の左翼を攻撃し鴨綠江軍の前進を容易ならしむる事。

第四軍 第一軍の左翼に連り全軍の轉回運動を容易ならしむる目的を以て、我軍の中央に向ひ企圖せ

らるゝやも計り難き敵の攻撃に對し隨時我より突進すべき準備をなすべし。

第二軍 第四軍の左翼に連り、第三軍の轉回運動を俟ちて、用ひ得べき最大の兵を以て前進する事。

第三軍 敵の右翼に迂回し敵の退路を包む目的を以て前進せよ。

只今申した任務の下に各軍は共同策戰に當り何れも大なる苦戰をなしつゝ前進し一時は勝敗をも疑はしむる様な有様でありました。然し幸な事が一つあつた。

それは外でもない、ハルビンより南下して來たクロバトキン將軍は最初我れの左翼に向つて攻撃を始め様としたが我れの右翼即ち鴨綠江軍の中に第十一師團の兵が入つて居るのを見て些か躊躇したのであるそれは第十一師團の兵は旅順攻撃の乃木軍に加はつて居たのであるが今は此の鴨綠江軍に加はつて居るのである。即ち彼れは鴨綠江軍を以て乃木軍にあやまり急に軍を回して我れの右翼に向つて來た。所が來て見ると案外、乃木軍は其處に居らない。これは失敗つたといふのでまた引き返すといふ騒ぎ。若し此の時クロバトキン將軍が斷乎たる決心を以て我れに逆襲したならば實に日本軍は危ふかつたのである實に天佑といはうか、鴨綠江軍が一寸頭を出したのは我が軍大勝の一因であつたのだ。こんな行掛りになつたゝめ約三週間を費して遂に我軍は武勇熱烈なる國民の後援により十二年前の今日奉天に入城し第三軍は敵の退路を脅かし彼をハルビンにおし込めたのである。此に於て全軍は奉天城に集まり始めて萬歳を絶叫しました。此の時我軍の得た捕獲は次の如くであります。

|    |            |    |      |
|----|------------|----|------|
| 捕虜 | 二萬一千七百九十二人 | 大砲 | 四十八門 |
| 小銃 | 三千四百挺      | 軍旗 | 三    |

#### 其他 彈藥糧食夥し

かうして私が三十分もかゝらずに戰況の終始をお話すると或は諸君は易々として我軍が勝つたかの如く考へられるかも知れない。けれども此の間には口に盡す事の出來ぬ艱難辛苦をしたものである。或る隊の如きは日に六合の飯を三合に迄減らして戰を續けた事もある。又滿洲は御承知かも知れないが大變水が乏しい、あつても極めて不潔な水である。その不潔な水を汲んで渴を醫した等の事は珍らしくなかつた。冬になると地はすべて凍つてしまふ。雪はあまり降らないが地面二三尺まではカン／＼になつてしまつて兵が工具を用ひてコツ／＼やつたつて容易に堀れない。そんな場所をも只管熱誠と氣象を以て塹壕を堀つて行つた兵士の苦勞は並大低のものではなかつた。又壕から一寸でも頭を出すすとすぐボンボンとやられるので少しも頭を出す事が出來ぬ。困つた事には小便するのにも不自由するといふ有様。だから或る隊では鑛詰の空罐の中へやつてそれを敵に投げ付けるといふ様な滑稽な工夫が始まつた。斯ふ言ふと諸君は笑ふけれども實際當然出すべき物を出せないと來た日には人間一番苦しいのである。その苦しい揚句がこんな工夫になつたのである。笑ふ一方には大いにその苦勞を察せねばならぬと思ひます。次に日露戰役が如何にして我軍の勝利に歸したかといふに就いて少し話して見たい。

第一の原因は敵將の優柔不斷といふ事である。

先にも申した通り敵將クロバトキンが最初から斷乎たる決心を以て攻勢に出でたならば或は日本軍は危ふかつたかも知れないのである。それを優柔不斷な爲めに遂に虻蜂取らすといふ事になつたのは返す返すも我々の考ふべき事である。だから我國に於ては此の前例に顧みて一旦決心した事は徹頭徹尾やり遂

げるといふ方針を取つて居る。手段方法は少し位拙かつてもかまわない。決心は何處までもやり遂げるといふのは現今に於ける我が軍隊の主眼とする所であります。

然し之れは軍隊ばかりではない。諸君に於ても亦其の通り。どんな故障が起らふとも決心した事には一方も譲らぬといふ覺悟は飽く迄必要であらうと思ふ。

今度の試験に一番になつてやらうと決心する。決心したらグン／＼／＼勉強して何んな事が起つてもきつと一番になり遂げなければいけない。此れは大いに必要な事である。

第二の原因はロシアの豫備軍隊の事である。

一体ロシアには豫備軍といふものが澤山あつて豫備師團を編成して居るが之れは現役兵に比して幾分か素質が劣る。日本はこれを知つてゐるものだから何時も劣弱な敵の豫備兵に向つて攻める。すると此所に龜裂を生じてそれにつけ込んで我軍は突撃したものである。所謂敵の弱兵に乗じたのである。此に於て戦後ロシアは大いに顧みる所があつて大金を投じて陸軍の改革を實行し今は豫備師團なんといふものは無くなつて居ります。だから現今のロシア兵は皆強い。

然るに戦後日本では此の豫備兵といふものを作らへた。即ち豫後備兵を軍隊の主眼とし現役兵をその間に若干交せて軍隊を組織してゐるのである。負けたロシアは日本に倣ひ、勝つた日本はロシアに倣つてゐるのである。まるで引つくり返つてゐるのである。

其れ故軍隊では豫備兵即ち在郷軍人の教育には上は元帥より下は我々に至る迄頗る頭を悩まして居るのである。いくらでも在郷軍人を溜めて置いてさあといふ時ウント出すといふ方針を取つてゐるのである。

これは我國富が未だ發展せず爲めに多數の現役兵を養ふ事が出来ぬからである。

第三の原因は國民が義勇奉公の精神に富める事である。諸君が常に記憶しまた守つて居られる所の教育勅語の「一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ」といふ精神は何處までも我が國民の全般に徹底して居たのである。

この精神は第一召集の時に發揮された。在郷兵、補充兵、未教育の壯丁等を召集する時彼等は召集令狀が來ると「ヤア來た愉快だ」といつて直ぐ兵營に飛び込む。誰れも「アアいやだ」なんて頭を悩ますものはない。中には足を傷したり頭に熱のある者等もあるのであるが、それでもかまわずやつて來る。「オヤお前は少し熱がある様だ、今度の召集は少し延さう」などいふと「イヤもうどうもありません、何卒やつて下さい」といふ。

足の痛いものも其の通り、實にどうも元氣がある。

海外に出稼して居る者も戦争と聞くと宙を飛んで歸つて來て「私もやらして來れ／＼」といつて願ひ出る。徴兵を忌避した者や兵營から逃げ出したもの等も自ら出て來て從軍を願ふ、自分で出て來ないものは親や兄弟が／＼といつて連れて來る。

また自分が戦ひに出ると家が貧しくて妻や子が食ふに困るといふ者、又は親が病氣でねて居るといふ者等も少しも躊躇せずやつて來る。送る方のもも決して「困つた」といふ様な色を見せぬ。ある所では此んな事がありました。家は貧しく妻は病床に臥して居る、其處へ役場から呼び出し狀が來た。夫は妻の心を思ひやつて「税金の滞納の催促だらう」と欺して置いて役場へ行く、行つて見ると案の狀召集

令狀だ。勇んで家へ歸つて見ると妻は病床に端座して自害をして果てゝ居る。遺書に曰く「自分が生きて居れば夫の足手まといになるは勿論戦場へ出てからも自分の事を思ひ出す様な事があれば充分の働は出来まい。故に自害する」云々と、實に我國でこそこんな美談もあるのである。

また一般的義勇心の發揮とでもいふ方にいつては、世人の出征者及び遺族に對する同情、負傷兵の介抱、出征兵士の見送り等實に盛んなものである。金のある者は献金をする、それが積り積つて貳百萬圓にも達したのである。

公共團體としては赤十字社、看護婦人會等が實によく世話をして呉れる。確か毎日新聞であつたと思ふが出征中將校全体に無代で毎日、送つて呉れる新聞社もある更に舉國一致の發現は議會に於て見る事が出来た。即ち前後拾億八千萬圓の軍費を滿場一致で可決した等まるで全國民は狂者の様に勇壯活潑である。軍人間に義勇の精神が充分發揮された事は今更申すまでもなく、我田引水に陥るからあまり強い話はしませんが。實に我々は働かざるを得なかつたのであります。

一例を擧げて見るとかの旅順攻撃の際の如き、其の困難は既に諸君も御承知の事と思ひますが何度攻撃をしても功を奏せぬ。大砲をうつても役に立たない。遂には肉彈突撃といふ策戦を用ひたが此れも沙々しく奏功せない。國民一般も地團太ふんで心配し始め「一体軍人は何してゐるか」といふ様な聲え聞える、が之。天皇陛下は痛く大御心を悩ませられ「お前の方は少し戦争を急げよ」といふ詔勅さへも賜はつた。斯うなると最早生きて居られない。自分はその時怪我して補充隊に歸つて居たのであるが國民は怒り出す陛下に大御心を悩ませられるといふ事になると實に口惜しい。ドン／＼補充隊から戦線に送り

出す兵士や將校やは恰度牛が屠場へ引かれる様な心持ち「今度も駄目か」と思ふと何となく氣が滅入る此んな殘念な狀況の下にある時或る方面に於て決死隊が組織された。成功の覺束ない事は分つてゐるのであるから逆も應募する者はあるまいと思ひの外、一度び募集して見ると應募人員は豫定に大超過してその選定に苦しむといふ有様。やれば戦死は分つてゐる。而かも此の元氣は實に何とも言ひ様もない位であつた。當時ある決死隊を指揮した將校が突撃の前夜その同期生に送つた手紙が此にあります。この人は福井縣九岡の藩士で此の手紙は充分當時の士氣を示すものと思ふ（全文或は脱漏あらむ、諒焉）

拜啓 御手紙有難く拜見仕候、愈々御清適慶賀致し候、さて小生事明二十八日午前十時を期し九十名の特別中隊を引率して突撃決行いたすべく候、生死天にあり。陛下の詔勅に對し奉り、國民半歳の熱望に報ゆる爲めあらん限りの精神と体力とを盡して突入いたすべく候。倒るれば起ち傷つけば奮ひ飽く迄素志を貫徹せむ。明日は二龍山頭白雲の上に立ちて日本武士の花と散らさんとす。

辭世

死を誓ふ武夫の——（筆記し得ざりき）

終りに臨み滿腔の熱誠を披瀝して兄が御武運長久の程を祈り申し候。

十二月二十七日夜半

私は此の手紙を常に愛讀して居ります「生死天にあり 陛下の詔勅に對し奉り、國民半歳の熱望に報ゆる爲めあらん限りの精神と体力とを盡して突入いたすべく候。倒るれば起ち傷つけば奮ひあく迄素志を貫徹せむ。

明日は二龍山頭白雲の上に立ちて日本武士の花と散らんとす。」かくの如き事は實に我國にして始めて見得る事である。決して笑ひ話ぢない。私は此の手紙を讀む毎に常に感涙に咽ばざるを得ないのである。かゝる壯烈なる人を追懷するはまた實に我々の責任ではないだらうか。

此れは將校の例であるが兵隊の中にも此んな事は随分ある。兵が砲彈に當つて倒れる時はきつと天皇陛下萬歳と叫んで死ぬ。決して痛い／＼なんていはない。死ぬ時萬歳を絶叫し或は「軍人は……」といふかの五ヶ條の一節を唱えずして死ぬ者は一人もない。こんな事は日本人でなくては出来ぬ事である。死に際迄「一つ軍人は忠節を盡すを本分とすべし……」といふ微聲を残して死ぬといふのは實に壯烈無比ではないか。

我々の祖先は皇祖祖宗の御恩を被つてゐる。それが子孫に傳はつて居るからかうならざるを得ないのである。二朝事ある時に際しては諸君もこうならなければならぬ。またきつとかうなる事と信ずる。

中には自分の襯衣に五ヶ條の教諭を書いてお守りにして居た者もあつた程である。

第四の原因は畏多い事ではあるが天皇陛下の御威徳である。此れは自分が今更喋々する必要はない事であるがその一例を擧げて見るとかの奉天戰の時即ち三月九日の朝非常なる大風が吹き出してドツ／＼と塵埃を捲き上げる。殆んど敵味方も分らぬ程の有様であつた。而かもその風が敵に向つて吹きつけるので敵はねらひを定め様としても目が開けない、我が軍は後の方から吹かれるので何ともない。これは實に陛下の御威徳の然らしむる所であつて此んな例は我國に古來少くないのである。かの元寇の際の如きその名高いものである。此他申し上げたい事は色々あるが此に陛下の御製を二つ三つ諸君と共に奉唱

して御説明に代へやうと思ひます。

#### 御製

子等は皆戰の庭に出で果て、翁やひとり山田もるらん。

いくさびど如何なる野邊に明すらん蚊の聲繁くなれる此の夜を。

國の爲め斃れし人を惜むにも思ふは親のこゝろなりけり。

御製の意味は今更説明申し上げる迄もないと思ひます。兎に角日露戰爭は當時のあらゆる武器を以て兩國の興廢を賭して戰つたものであつて實に世界あつて以來第一等と稱せらるゝ大戰争でありました。けれども目下行はれて居る所の歐洲戰爭に比べて見ると規模の點からはてんで比較にならないのである。然し日露戰役は誰が何といつても一番えらい。見給へ歐洲戰爭はごつちが勝つたとも負けたともさつぱり分らない。然るに日露戰爭は瞬く間に我が大日本帝國の大勝利に歸したのである。然しえらい／＼とばかり言つて居るのでは役に立たない、時勢が進んで居るのでいくらゑらいからといつたつて黙つては居られない。

故に歐洲戰亂の事についてこれから少しお話しやう。此所に掲げたのは「歐洲戰爭經過一般圖」といふ地圖で一目して兩軍戰況の大畧を知る事の出来るものである。即ちロシア方面に於てはロシア百二十五師團、獨逸九十五師團の兵が戰つてゐる。英佛白の方面即ち西部戰線では獨逸主として此れに當り南には塞、墨が聯合して戰線を維持し、高加索方面には露土相對しスエズ方面には英土相對して居る。

戰線の長さは西部戰線百八十里即ち東京から岡山まで東部戰線は四百五十里即ち青森から廣島までの長

さである。而して奉天戦は戦線が三十五里、實にどうも比較にならない。

次に日露戦役と今回の歐洲戦争との相異なる點を少し擧げて見やう。

動員兵數 日本百十萬人 協商側三千萬人（男子の五分の一）  
露國百二十萬人 同盟側二千五百萬人（男子の三分の一）

一日經費 日本參百六拾萬圓 獨逸四千萬圓  
露國四百貳拾萬圓 英國五千萬圓

戰費 日露合せて四拾參億四千萬圓 敵味方合せて昨年迄に千參百億圓

飛行機 なし 同盟側二千臺

協商側八百臺

自働車 なし 同盟側一萬五千五百臺  
協商側一萬三千臺

此の外大砲、彈丸等の數も夥しい相違を示してゐる。こゝにいふ譯で歐洲戦争は實に大規模なものである。而して次に歐洲戦争から得た教訓に就いて少し話して見やう。

第一、平常より戰闘準備を完備すべき事。

此の戦争が始まる迄は世界各國は軍國主義を誹謗するといふ傾向を有つて居た、けれ共獨乙はそんな事に少しも頓着せずズン／＼準備を整へてゐたのである。故に四面皆敵を受けたる今日の如き場合に、もすべての必要品を悉く一國內にて支辨し毫も苦しいといふ色を見せない、此れに反して他の國は食

料其他の品を外國に仰いでゐる。甚だしきは小銃さへも我國から賣つてやらねばならぬといふ様な有様である。或る我國の軍人で獨逸へ留學して居つた人の話にかの柏林の停車場には數十、數百と數知れぬばかりの線路がズツと敷設されてあつて、それが皆赤錆になつて居た。此れを見て其の人は何といふ愚な不經濟な事をして置くのだらうと私かに失笑して居つた。然るに一度戦争が始まつて見ると何ぞ量らん此れ等の鐵道は悉くピカ／＼と光り出した。それは軍隊の輸送、軍需品の輸送にその幾百の軌道が間斷なく使用されるからである。此ういふ風に平時の準備が完備して居るためいざとなればリエージの要塞の如き殆んど理想的の要塞でさえも僅か一週間にして陥落させる事が出来たのである。第二、技術の進歩に伴ひ此れを有利に應用する事。

鐵道の利用は前に述べた如くであるが其他追撃用の自働車の如きいざ敵が退却するといふと味方はすぐと此れに飛び乗り機關銃を塔載してドン／＼追つ掛ける。充分追ひ付いた時ドンと車を止めてパンパンと打ちかける。距離が少し遠くなれば又ドン／＼走り出す、實に巧妙を極めたものである。此他自働車は彈藥糧食の運搬傷病兵の救助等に巧に利用されてゐる。其他獨逸側に於ける航空機の利用、四十二瓏といふ途方もない大砲、毒ガスといふ様な奇妙なもの等がある。此の毒ガスには重いものと軽いものとあつて重い方は突撃等の時用ひ、軽い方はドン／＼敵に打ちかけて、ガスがスツツと昇つて行く時分ドツと一時に進出する。而して毒ガスに就いては我國でも大分研究されてゐます。

此の他間諜の利用は頗る盛んなものであつて殊に獨逸側がすぐれてゐる。東部戦線に於ては間諜を商賣にしてゐるユダヤ人といふ奴が居り、敵味方鼻をつき合して居る所でその活動は實に目ざましいも

のである。例へばロシアの參謀が明朝五時を期して突撃をやらうといふ事を決定する。それが何かする。獨逸側の陣にチャーンと一つの札が立つ。讀んで見ると「お前の方は今日五時に突撃して来る筈だのに何故未だ來ないか」といふ風な事が書いてある。此の敏捷さにはホト／＼我國の軍人も舌をまいて居るのである。

### 第三、兵力の大を要求す。

今日の様に戦線が矢鱈に長くなると勢ひ多數の兵を使用せねばならない。負傷兵も澤山出来る。故に出来るだけの大兵を以て最初にガンと一撃を喰はして早く戦争を片付け経費を少くせねばならない。故にいざとなれば諸君も直ぐに出られる様に平生の訓練と覺悟とが大切である。現今各國は十七八歳より五十六歳までの男子を兵士に採用して居ります。填太利の如きは十四五歳より六十四までを使用して居る。かうなれば諸君は勿論此の中に入るのである。將來はお互に一朝事あれば直に武器を取つて起つ覺悟を持つて貰ひ度い。

### 第四、積極的國民性の發揮。

あまり大きな聲で申すと工合が悪いがわが聯合側はどうも攻撃策戦が振はない。日露戦役時には我軍は兵の補充さへ終ればドン／＼此方からぶつ／＼かつて行つたものであります。少し位兵が少いのは少しも顧慮せなかつたのである。然るに今度の戦争は聯合側は大事に大事をとつて少しも攻勢に出る事をせぬ。また日露戦役の時には捕虜といふものが少なかつた。殊に我兵は捕はるゝよりも寧ろ命を捨てたのであります。然るに何事ぞ今度の戦争には敵味方とも何萬何十萬といふ捕虜を造らへてゐる。

今後戦争があるか無いかといふ事は分りませんが私は恐らく絶無ではあるまいと考へます。若し一旦戦争が起つた時こんな元氣のない事をやつたならば國は實に悲惨な目に遇ふのであります。只歐洲戦の話をする計りでなく百尺竿頭更に一步を進めて此の敵と如何にして戦ふべきかといふ事を充分考へて頂き度い。

要するに戦は精神である。兵の眼目は精神に歸着するのであります。

時間の關係上此れで話は止めますが返す／＼もお互に精神を練るといふ事を忘れない様にせなければなりません。一旦緩急あれば義勇公に奉ずるといふ大精神は我が國民の須臾も忘るべからざる事である。それには先づ第一に身体を鍛練せなければなりません。健全なる精神は健全なる身体に宿るといふのは實に千古の名言である。お互に將來体育に努めて剛健なる身体を養ひ度い。それには武道の練磨が第一等である。願はくばわが國固有の武道に於て猛烈に身体を鍛え上げ以て剛健なる意志を養成し、一旦決心した事は何處／＼までも徹底させるといふ固い心を養つて欲しいと思ひます。

長らく御静聽をわづらはした事は感謝に堪えませぬ。

終りに臨み講演中間々軍隊的の言動があつて或は諸君に對し不敬に互つた事があつたかも知れませぬ。此れは自分の習慣性の然らしむる所で決して惡意あつての事ではありませぬが實に恐縮に堪えませぬ。此れで失禮いたします。(文責在記者大島居)



## 論 說

### 社 交 生 活

第五學年甲組 瀬 川 幸 造

家族生活は人格を修養するに無論必須の條件ではあるが、しかし人格は家族生活に於てのみ完成せられることは出来ない。即ち社交生活と相俟つて初めて完全な人格を作り得るのであつて、二者は人格を成す上に於て決して離す事は出来ぬ。實際に於て、吾人はよし家族生活のみで人格が成るにせよ、家族生活だけで満足出来るものでない。他人に自己を知らしめ、自己の他人を知らうとする性情——本能——が人に存して居るのであつて其の性情の満足を得ない限り、到底堪へられるものでない。又世に處して行く上に於ても、社交生活が無いとしたら、人を用ひ人に用ひらるゝ等の事は勿論ない。それがなければ社會は成立せる。社會は成立し、人性は満足されるには、社交生活を家族生活と共に必須の條件とする。そしてその特質は人を知り人に知らるゝに在るのである。又これが其原因でもあり、目的でもある。家族生活の事に就いては皆承知の事と推察するが一寸念の爲書いて置かう。

(一)家族は人間協同生活の根源である。社會を成す單位であり、社會の成り立つ元素である。人間はこの家族に胚胎し、實現せられるのである。親子夫婦兄弟姉妹の和親の間には克己もあり自制もある。苦

痛を共にし快樂を分つ間に火の如き同情愛他の精神が燃えてゐる。世に父母の子に對する愛殊に母の愛ほど私心なく純乎として純なるものが又とあらうか。家事を共に爲し勞苦を共に分つ間に一致協同の思想は不言不語に通うて居るのである。實に家族はうるはしき地上の天當である。需々たる家族あらば是や人生至上の歡樂である。是の家族の生活よりして初めて大我と小我との區別を生じ來るのである。「其の生命を惜しむ者は之を失ひ、我が爲めに其の生命を失ふ者は之れを得べし」との眞理は實に家族より初めて發する閃光である。小我の生命を惜む勿れ、大我の生命を得よとは道德法の根源にして社會協同生活の原則である。

(二)家族は人間歴史的生活の根源である。

人の智識も家族によつて傳へ發達し行くものである、人間が若し孤立したならばその智識は極めて貧しいものとなる。衣羅萬象一々自ら見自ら聞き、自ら經驗しやうとすることは、一個人の限りある力、智慮見識では到底なし得るものでない。萬人の見たる所、聞いたる所經驗したる所を相互に知らせ合つて人智の進歩發達を見るのである。下等動物と人類との差別も實に茲に存するのである。禽獸の意識は連續甚だ短く一代に及ぶものは極めて少ない。だから其の經驗する事項は其の度毎に新しい。以て子に傳へ孫に傳へる事がない。即ち彼等に智識と云ふもの乏しい所以である然るに人間の意識は一代を以て終りしない。祖先の意識は子孫の意識と連續して益進歩發展するのである。歴史の意義はこゝにある。人間の社會的動物たるの半面は歴史的动物たる事である。家族は實に人類の進歩のよつて來たる歴史的生活の根源である。

(三) 家族は複雑なる大社會の縮寫である。

親子ありこゝに上下の交際がある。夫婦ありこゝに同輩の社交がある。弱者に對して、男女の間に於ての交り、それ等は皆家族の中に存じてゐるのである。即ち

(イ) 社交は家族の中より始まるものである。

(ロ) 經濟も家庭にあるので、アダムスミスの學說を讀むまでもなく、家庭の中には經濟學の原則たる分業もあるし、協力もある。凡ての經濟的道德こゝにあることを知るのである。

(ハ) 政治も既にその中にある。云はい南親は首長に比すべく兄弟姉妹婢僕は人民に擬すべきである。紛を解き色を和げ争を止むる等大にすれば一國の政治と同じである。

(ニ) 宗教もある。祖先を祭り長しへに其の靈魂に仕へんとするは、一種の宗教ではないか。

(ホ) 美術、文藝、娛樂も皆既に其の中に存して居る、要之、大にして社會百般の現象は、小にして家族の中にあるのである。大小の差別をとつて考へれば、家族生活は即ち社會生活である。以上が家族生活に關する事で次は愈社會生活である抑も社會生活の利益及快樂は實際其の物の中に存じて居る。故に若し他の目的、譬へば人を利用しようとか、我慾の爲とか云ふ事が挟まれてくると、實際は其の本義を失つて俗語の水くさいと云ふことになり、社會の利益も快樂もあつたものでない。であるから社交の快樂利益は實際其の物の中にあつて、他の利益を狭むときは不可である。社交の方便としては飲み、食ひ等勿論善いけれど、最も善きは遊戲談話である。かくの如きものは、一寸つまらぬやうであるが、其の實決してそうでない。喜劇遊樂自然に蔽はんとして蔽ふことの出来ない自個の天真を暴露し談笑話諧の間に

は自ら打ちとけて赤裸々に自己を投げ出すことが出来る。即ち最もよく自個の本性を表すことが出来て且つ他の利益を挾むことがないから社交の方便として最も適したものだと思ふ。そして社交を圓滑ならしめるには、どこ迄も社交の本義を忘れてはならぬ。即ち人を知る爲に其の人に對して同情を表すことを忘れてはならぬ。人に知らるゝ爲めに自分の事も許りなく胸襟を開く事を忘れてはならぬ。

社交には二つの形式がある。(イ) 廣く交ると(ロ) 深く交ると通常(イ)を社交と云ひ(ロ)を友誼といふてゐる。これに伴ふ三つの規則がある。此の一つでも缺くときは社交の完全は破れてしまふ。即ち(一)言ふべき事を云ふ事(二)黙すべき時には黙する事(三)耳を傾くべき時には充分耳を傾くべき事、即ち對者の言に十分なる同情を發表することである、而して社交の原則はどこ迄も彼此平等に行つて、一方に偏してはならぬ。即ち、根掘り葉掘り人の事を聞くことのみ勉め、又は自分の事のみ様々語る事等は、取りわけて心せねばならぬ。社交の効果の重なるものは、家族生活の短所を補充することである。家庭は同情が溢れて居るからして自然と同化されて、差異が少なくなる、随つて思想の單調なるを免れない。即ち不活潑になる傾向がある。凡そ活動は多少の反對、抵抗、異論、異説のある所にあるけれど家庭にはそれがない、即ち活動が乏しくなる所以である、であるから、社交の範圍の狭小なる弊害は其の人をして井中の蛙の如からしむることである。田舎の人は正直であり質樸であるけれど、世間知らずになり、世に後るゝの弊があるではないか。鎖國時代の日本を顧みれば、攘夷の論勤王の説に盡瘁せる人の外國に對する態度、二百五十年の長夜の眠り、黒船の聲にさまたれた折の有様、見來れば社交狭小の弊を知る事が出来やう。旅行に利益があると云ふのも社交が廣まるの謂に外ならぬ。異郷の山川、歴史、社會、人情を知

るの利益があるからである、かく社交の廣まるにつれ、活動が激しくなる、而して不斷適度の活動は以て人の早老を防ぐの方法である。且つ精神的に云へば活動の量について時間の長短は定まるものであつて活動の一定時は不活動の一定時よりも長いといふ道理が分るのである。外國及び外國人との交際に就いて云へば、その利益は丁度旅行の利益に等しいけれど、更に故郷を思ふの情をますべく、健全なる愛郷心の源ともなることである。深く交はる、即ち通俗の友誼について、吾々は十分明確なる觀念を持つて居らねばならぬ。現今文明の弊はあらゆる人心を震蕩して、眞個のフレンドシップは何處にも見がたくなつた。かゝる場合には更に友誼の必要を痛切に感ずるのである。友誼は二要素より成る。

(一)平等 (二)差別の要素、即ち是れである。第一、同情がなくは友誼は成り立たぬ、併し乍ら餘り同性質の人は却つて反撥し、よしなき競争に腐心することになる。同情せず補助することをせんでどうして友誼が成り立たう。之れを保持し行くの道は三つある。(一)公明なれ (二)寛容なれ (三)尊敬せよ、である。互に缺點は打ちあけよ。互に過失は許すべし。輕蔑は反目の原因なるを知れ。誰か精査して缺點なく過失なき人があらう、輝きわたる太陽にも猶望遠鏡に映する姿には黒點があるといふではないか。缺點を去り、過失を忘れて其の光明面を見れば、又美點長所決して乏しくないであらう。その一方を互にゆるしその他方を互に尊敬し行くに於て眞の友誼は保持されるのである。

青年時代は最も友誼を結ぶに適した時である。同窓と云ひ、竹馬と云ひ、兄弟も只ならざる交は一つに小供の折少くとも青年時代の賜である。蓋し、この時代が最も人情が新鮮で、同情に富み、利害の念もうすく、他の繁累もないからである。長じてからは利害は多く、繁累は繁く、友誼など結ぶべき素質は

大に乏しいのである。

効果は(イ)悲みを分ち喜びを増す(ロ)智識を増す(ハ)助力を得、而して吾々は親にも云へば兄弟にも話せない事をも尙友には打ちあける、即ち友は時に親ともなりて誠を與へるであらうし、兄弟ともなつて様々の事をもしてくれる事が出来る。しかれども思へ、思つて銘として忘るべからざるは、友誼は結ぶ事難くして破ることの易き事である。

社交生活は家族生活と相俟つて人格の修養せられる所以を前に述べたのであるが、物極まれば必ず弊が伴ふ社交生活にて亦弊害の伴ふことを免れぬ。其弊は(一)形式に流れることである。社交に伴ふ禮儀も形式に流れては徒らに禮儀虚儀となつて精神なき瑣細のものとなし去るのである。(二)虚偽に陥ることである。殊更に圓滑ならん衝突なからんと、目前の小さき考へより、此を思ひ乍ら彼れを口にし、筆にし動作を表すやうになることがある。(三)習慣の爲めに束縛せらるることである。徒らに在來のしきたりに拘るの結果は如何なる事柄にも古き習慣を強ひんとするやうになることがある。(四)自由失はれ、道理亡びんとし、良心鈍らんとすることである。我が良心の命する所に自由に行くことが出来なくなるのである。積もりし幾多の弊害はむしろ社交なき一少なかりし一原始の生活、未開の生活を羨むやうになるのである。反動は起らざるを得ぬ、起れば又た極端ならざるを得ぬ、そこで普通道徳をも無視する自然主義が表れ來るのである。曰く、開化は自由を束縛する、文藝や、道徳や一切人爲の事業は虚偽である。吾々はかゝる人性に戻る文明を去つて、造物者が作りしまゝの原始に歸らうではないかといふ叫び聲が起る。古代ギリシヤの末世には最も此の思潮が流れたので、古代の自然主義は彼のダイオゼニース

によつて代表されたのである。彼はソクラテースの説の一部を極端に敷衍した人で嘗てアレキサンダー大王が彼を言づけた時彼は桶の中に生活し、犬猫を友に水を掬んで居つた。大帝曰く、汝何をか望める。彼の答ふるやう、速に去るべし、我がうける太陽の熱をさまたぐるなかれど。大王嘆じて、あゝ我れアレキサンダーたらすんば寧ろダイオゼニースたらんど。蓋し、彼は大怒、此は無慾共に極端に走つて居る。ナボレオン、秀吉、シーザーは前者に屬し、ダイオゼニース及び其他の隱仙は後者に屬する。然れども道は中庸にあることを忘れてはならぬ。中世の自然主義は宗教上の理想より起りたる禁慾主義であつた。これ一時なか／＼勢力があつて僧侶共に此主義を行はんとしたものである。

近代の自然主義は佛國のルーソー以來の傾向である。極端に當代を罵つて道德を虚偽として形式は人間本來のものでないとして居る、これもとより反動である。反動は常に不健全を免れぬ、人間として生存する間は全く形式を離るゝことは出来ぬ、道德は必然に伴ふ、その道德を否定してどうして社會が成り立たうその束縛によりて、自我を破壊すると感ずるは、自分の修養の足らざるに因し、その弊に流れたるに因するのである。

要するに社交生活の弊害百出に至つて起つたのが自然主義の説く所を以て社交生活を否定することは出来ぬ。蓋し弊なき社交生活には自然主義は其の鋒をむけることは出来ぬ。社交生活は必要である。而して自由と社交との調和される處に於て、其の完全を見ることが出来る。形式も道德も此の境にあつては自個をして愈自由ならしめ、自在ならしめるので、人は其の中に居つて初めて人たることが出来る。ソクラテースは云ふた。

余は學ばんと欲す、而して原野樹木より何物をも學ぶ能はず、只世上の人よりして學び得るのみ。  
英國のデモンソンも云うてゐる。

君よ、君が緑野を見たりし時は凡ての緑野を見たり。

余は人を見んことを欲す。いざチープ街路に行かなむ。

然り、緑野曠原に於ては遂に人性を完くすることは出来ぬ、社交生活なしには人格は成り立ち得ぬ。諸君等注意せよ、諸君等の人格完成を庶幾す。(了)

## 旅行

第五學年甲組 伊之坂三洲

苔滑かなる英雄の墓碑を掃つては、春風秋雨の迹に哭し、尾花なびく古戰場に杖を停めては兵どもが夢の跡を吊ふ。秀麗なる峯巒を仰いで、心神を清め溶々たる清流に臨みては耳目を洗ひ、高嶺の雲に嘯きては宇宙を挟み、曲浦の月に吟じては胸襟をひら／＼。嗚呼吾人の快樂何ものか此れに過ぎん。遠遊なる哉旅行なる哉。

男子須養拔山倒海之氣、丈夫須遊名山大川之間。

七寸の鞋三尺の杖之れ實に吾人の好伴侶、模糊一日、白雲の如く香雪の如く花影疎々として冷香肌に沁む春二三の友と語ひて嵐山に清遊を試むるも可、新緑滿天滿地の夏あるに雲を排して高山に登りあるは

海邊に行きて遠大の氣を養はんとする彌々可なり。

碧天水の如き秋は殊に旅行の好時期にして白雲翳然として飛雪粉々須臾にして盡く封せらるゝ山徑の旅に至つては眞に此れ詩なり。

春夏秋冬何れの時山野河海何れの處を問はず吾人は學生の旅行を賛するものなり。如何となれば我等學生は活字に押されたる書籍のみによりて智識を得べきに非ず。宇宙に露はれたる自然の文字の更に我等を裨益する事の著且つ大なるを知ればなり。英の詩人ミルトン未だ一青年たりし時嘗て伊太利に旅して曰く「汝の思想は蓄積せざるべからざるも汝の兩眼は各處に散見せしめざるべからず。」と、蓋し旅行なるものは獨り自然の風景に接するのみならず、また其地に於ける人情風俗言語古跡を観察して其見聞を弘め其心情を高潔ならしむべければなり。

貝原益軒も旅行は良心を喚起し鄙吝を洗ひ濯す助となり徳を進め智を弘むといへり。げに自然の風景山川の美に接するは人の精神をして高尚ならめし人心をして現世の浮薄より遠ざからしむ。

梅顯まづ笑み柳眼漸く舒ひんとす。微風一陣季は正に春に入らぬ。旅行の最好時期、諸子はこの季を如何に過さんとするか。さはれ竹椽徒らに眼を貪るべからず。靑鞋をふみ竹杖を友とし萬丈の紅塵を避けて宜しく悠々たる江山を踏破すべし。

山は到る處に聳え河は到る處に流る。吾人學生何を徒らに屋内に蟄居のみすべけんや。旅行なるかな、遠遊なる哉。

## 學生と元氣

第五學年甲組 松岡源之眞

元氣は正氣である。凡て物事の根本となる氣力である。又社會進歩の根柢にして人類活動の淵源である。世人よく亂暴を元氣と誤る事あり、我々學生に於ても亦然り、我儘勝手なる行をなす者もあれば、亂暴にして人を人とも思はざる振舞をなすものもある。尙甚だしきに至りては他人を誹り、人を侮り、或は人の秘密を發き人を陥し入れ、或は生徒の身分であり乍ら恩深き先生を呼ぶに綽名を以てするが如き、容赦ならぬ重罪を犯す者さへある、而して些も恥づる色なく傲然たる有様を見れば實に元氣あるが如く見ゆれども然らず。

又事をなすに當りて輕卒にして少しも落ちつく所なく、雷同的にして俗にいふ「上つ調子」「チョカ」なる者あり。其の來るべき結果の如何等は些も思慮せず無分別にして無茶苦茶に勢にまかせて行ふを見れば之れ亦元氣あるが如く見ゆれども實は然らず。前者と同じく誤れる元氣にして眞の元氣といふべきでない、然れ共風采揚れるものは風采揚らざるものを侮り、腕力強き者は腕力弱きものを侮り、氣の利く者は氣の利かざるものを侮り學問あるものは學問なきものを侮り、理財に長ずるものは理財に長せざるものを侮り辯舌の巧なるものは辯舌に拙なるものを侮る。之人情の常免れ難き事なれども我々學生たるものは深く戒しめなくてはならない。故に元氣は徹頭徹尾正義でなければならぬ。

元氣満々たる國民の相集りてなす國家は活氣あり。意氣消沈せる國家は常に其國民に元氣の足らざるに

よる。活氣ある國に入れば恰も戦争に大勝利を得た國の如く何事も元氣に萬事が愉快である。然る活氣なき國民の集まりてなす國に入れば恰も戰に敗北したる國に入るが如く何となく不愉快である。

尙元氣は愉快の觀念を起さしむるのみならず事物を進歩發達せしめ事業を成功せしめるものである。更に一步退いて我々學校に於て考ふるも亦然り。生徒に元氣ある事は取りも直さず其學校の意氣盛んなる事である。意氣盛んなる學校は學業も進歩發達を來し學校の名譽も揚り從つて卒業する生徒も優良なる譯である。其反對に生徒に元氣なく意氣消沈せる學校は如何、其學業の成績は劣等に學校の名譽の揚らざる事は我等の常に目撃する所である。

一家に於ても一個人に於ても亦同様である、活氣なき家族が繁榮し元氣なき人物が成功する道理はない昔からの歴史を繙いて見るに皆そうである。活氣の盛んなる國は興り活氣の衰へたる國は亡びる。又一國に於ても元氣ある時代は進歩發達も甚しく從つて發明發見も皆此時代に多く其反對に進歩發達の見るべきものなき時代は元氣の衰へたる時代なのである。故に元氣の盛なるは積極的であり元氣の盛ならざるは消極的である事がわかる。

かのボートレースや野球の試合等に於て盛んに應援するのも又劍柔道に於て大なる掛聲をなすのも一つには活氣元氣を増すためである。

若し世に元氣といふものなかりせば如何、國運も文物も發展せず事業に成功なく勝利名譽も得る事は出來ぬ譯である。

以上述ぶる所により元氣が如何に吾々學生にとつて必要であるか、又如何に我等大和民族にとつて大切であるか、と云ふ事が分るのである。

然らば現在社會の學生の有様は如何、果して眞に元氣あり活氣あるや否や、是れなか／＼趣味多き問題なり。

つら／＼惟んみるに、現在に於ける我國の學生界たるや、甚だ意氣消沈して元氣、活氣の何處に存在するやを疑ふのである。

斯く云へば諸君の中に「松岡生意氣な事を云ふな我輩の居る事を知らざるか」「其無禮な言は何ぞや」と言はれる、たのもしい學生もないではないが其れは甚だ少數である、嘗つて昔の學生について父より聞きし事がある。

父の曰れるには「我等の青年時代には學生と云ふ者は常に質朴剛健を旨として活潑にして元氣も溢れ衣服等にしても、此頃の學生の様ではなく、皆衣は肝に至り袖腕に至るものまで長い脛を出し、冬などでも足袋など穿く者は一人もない若し左様な事をしたならば友達より、輕蔑排斥せられたものだ、常に割木のやうなステッキをついて、棕櫚の毛で編んだはなをの厚齒の大きな重い下駄を穿いてごつ／＼と歩いたものだ服装と同様に食物に於いても然りである。

何時でも麥飯の辨當で米が何處にあるやら、分らない程麥が入つていて、恰も麥ばかりの様な物に梅干や、生薑漬偶には鹽鮭の切身があたり、焼芋などは好んで食べたものだ之が身分の高下を問はず家の貧富を問はず皆斯の様であつた云々」と云はれた。

余は是を聞いて實に然り、是れでなければならん又斯くあるべき筈であると思つた。

然るに如何、今日は學生は？。

腕や脛の出る衣服を身につけてゐる學生がおりますか？、夫れ程元氣のある學生が若し有つたとしても極く少數である事は疑いない、是甚だ心細い事ではありませんか、余の聞知する所によれば、九州四國の或一部の學生は此點に於いて割合に元氣があるそうです。

斯様な事を云ふのは余の身分として些か不適當かも知りませんが、まああの都會などに多い生意氣な學生を御覽なさい。長いセルの袴を穿き長い羽織を着て、金縁の伊達眼鏡を掛けておる者もあれば、頭の上にトンネルを作つておる者もある、又青瓢箪の魁けぞこないの様な青白い顔をしている者もあれば風俗を亂す様な流行歌を唱ふ者もある。

斯んな學生は我國の爲にならざるのみならず、他の善良なる學生をも墮落させ我國に害をなす者なれば宜しく制裁を加ふべきである。斯んな者は學生界の風上にも風下にも隅の板の上にも置けん者である。之皆元氣の足らざる證明の材料である。

食物に於ても然り今の學生の食べる物は皆贅澤である麥飯等を辨當に持つて來る者は減多にない。

偶に麥飯の辨當を見て大いに譽めてやると、「實は吾輩は麥飯は嫌やで、」ならないけれども、脚氣だから止むを得ず」と云ふ。麥飯を食はないと明日にも衝心して命がなくなるのを恐れて止むを得ず食べておる者である。

焼芋等でも食っていると笑ふ者がある、甚だ以てけしからん。次に言ひたいのは顔色である。

今頃の學生の顔色の青白い事は如何。

拙者が顔色が黒いから云ふのではない。

軍國多事の今日に於いて、斯んな青白い顔をしていて我大日本帝國を雙肩に擔ふ事ができますか、？

是即ち其人が自分は運動が不足である、吾輩は虚弱である云ふ事を證明している事になります。

我が赤鬼城下の元氣ある諸君よ眞黒銅色になる程運動し給へ然らざれば諸君が成功の途を急ぐ途中、もう少し身体が強くなれば全世界を片手に握る事が出来るのに我君をして世界の君たらしむる事が出来るのにと後悔しても、其時は最早や詮方ありませんまい。

丁度此頃（一月二月）になると吾校の控所に火がはいる。そうすると我一に暖まらんとて、此に押し合ひ突き合ひが始まる倒れる者もあれば傷める者もある。是甚だ愚な事で、假令どんなに激烈に押し合つて死人が出来るまで、突き合つて其行爲がいかに元氣あるが如く見へても、左様な行ひは眞に元氣があるとは云へない。

若し生徒に眞に元氣があつて、冬の寒い時等は運動場に於いて盛んに機械を應用したり、角力を取つたり、ランニングしたりして運動を行つたならば、冬にならうが雪が降ろうが火鉢に火を入れる必要もなく炭もいらす我々にとつては運動ができ、學校に於いては炭の費用が省けて、甚だ經濟的になるのである。

要するに、もう少し元氣が足らん様に思はれる。

此間も（一月二十五日）雪が一尺足らず積たつので体操（立花先生）の時間に雪抛げがあつた。

元氣よく、乗り氣になつて戦ふ者が少いので私は之を遺憾に思ひ「雪抛げ始め」の號令のかゝるや同時

に、雪玉を四つ五つ、かゝへて真先に進んだ、二間程前に進み敵を見かけて抛げつけた、敵は拙者一人を目懸けて抛げる、當るは、實際の玉であつたならば吾輩の身体は海綿が蜂の巢の様になつたでありませう。

然れども元氣と云ふものは恐ろしいもので、吾輩の外吾輩に従つたものが二三人あつたが、其少勢で敵の十五六人の者を運動場より裏門を追ひ出し遂に區裁判所の壁の所まで追ひ詰めた。此事は拙者に如何にも元氣があると自慢する譯ではない多く一般の生徒に元氣が足らん事を説明した一例である。其他豫習複習の怠り勝ちなるも、學校を缺席するものも、劍柔道の時間見學するものも皆これ、元氣の缺乏に原因するのである。慎しんで深く戒めなければならん。

拙者の元氣に付いて作りし俳句の内に、

元氣なくて何の己が勉強哉。

と云ふ句がある。元氣は學修上大切な事が分る。

然らば如何にせば此大切な元氣を涵養する事が出来るかと云ふ問題について研究せねばならん。如斯問題は拙者の様な青二才は、まだ經驗も浅く思想も豊富でないから、高尚な論を吐く事はできないが、拙者の考へでは之は氣の持ち方が預つて力があると思ふ。従つて愉快なる心持と元氣とは大いに關係する事で愉快の念があればこそ、元氣が出るのである、要するに愉快な心持を涵養する事は即ち元氣を養ふ事となるのである。

假令不愉快な事でも、假令悲しい事でも、是を無理にでも心地よしとし、楽しき事と思つて事に接すれ

ば、如何なる困難事も如何なる六ヶ敷しい事も愉快元氣に、爲し遂げる事ができるのである。

然らば、愉快の精神は如何にして、之を養ふか？

拙者は思ふ十分なる勉強と適度の運動によつてではあるまいか。古人も曰ふ。

「健全なる精神は健全なる身体に宿る」

と、實に然り。

故に我等學生たる者は大いに勉強すると共に一方に於いて大いに運動せねばならん。

是れを思ふと一週に一度や二度の柔剣道の時間も無駄に費すべきでない。

其外、陸上に於いてはランニングを、やり給へ、海や湖に行つてはボートを漕ぎ給へ、ボートや、ランニングのラストへビーの心持精神を以て、勉學修養に應用し給へ。如何に困難なる事業も此、ラストへビーの元氣には打勝つ事が出来ますまい。

其他、角力あり、野球あり、庭球あり、運動の方法は、いくらかもある。

以上の如くして愉快なる精神を養へば元氣は夫れ等と共に自然に、諸君等が知らない内に養ふ事が出来ると思ふ。

學生に元氣なきは男兒の男らしからず。生薑や胡椒の辛い様なものである。辛い胡椒が役にたゝぬと同様に元氣ない學生は學生としての價値のないものである。

故に我等學生は元氣ありて始めて學生らしい所が、あるのである。

拙者も日ならずして、此長い間、嚴冬楚雪の冬の日も九夏三伏の夏の日も、互に仲よく通つた吾が學び